

多数変異

国内初となる感染者が検査で確認された新型コロナウイルスの新たな変異株「オミクロン株」は、細胞に侵入するときに使う表面の突起「スパイクタンパク」の変異が約30カ所に上りま
す。これら多数の変異により感染力を増すとともにワクチンや治療薬が効きにくくなった恐れがあります。

国立感染症研究所はオミクロン株について、デルタ

ワクチン効果低減か

治療薬影響も懸念 オミクロン株

株など比べ変異に「最も多様性がある」と指摘。多様な変異の一部が、細胞への侵入しやすさを招く恐れがあります。実際、最初に見つかった南アフリカではデルタ株からの置き換わりが急速に進みます。

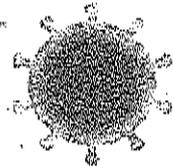
従来株の場合、ワクチン接種により体内で作られた抗体がスパイクタンパクと結合し、細胞への侵入を防ぎます。一方、オミクロン株は多数の変異があるため、抗体がうまく結合できない可能性があります。このためワクチンにとどまらず、抗体治療薬の効果への影響も懸念されます。

重症化リスクや致死率の高さは不明です。感染研は28日、オミクロン株を3段階で警戒度が最も高い「懸念される変異株」に指定し、監視体制を強化しています。

オミクロン株の特徴

- スパイクタンパクに約30カ所の変異
- 人の細胞に侵入しやすくなり、感染力が高くなった恐れ
- ワクチンが効きにくい恐れ
- 重症化リスクは不明だが、若年層は重症化しにくいとの報告も

(国立感染症研究所の資料などを基に作成)



表面突起のスパイクタンパク